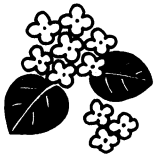
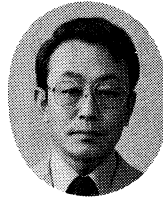


随想 ずいそう



詩吟と私

佐藤 正 憲



「国語の先生をなさっておいでですか」とよく問われることがあるが胸を張って「体育です」と答える。

詩情をよくとらえ、朗詠の節調にそって表現しようとしても、「気力」と「体力」が伴わない吟には説得力がなく、稀薄な感じさえ与えるからである。自分の吟は、生徒と共からだを動かす、「体育」を通して練り上げた吟だと自負しているからである。

詩情にふれ、からだ全体でおもいきり朗詠ができた時のすがすがしさはなにもにもかえがたい思いである。

やっと物心のついたころから父親の朗詠する詩吟をそら覚えに口ずさんで四十年の年月が過ぎ、いつの間にか私の生活の中に永住してしまった詩吟。父親の模倣から趣味活動へと発展してきた詩吟も今では漢詩の持つ奥深い魅力に取りつかれて、研鑽の日々が続いている。

素読を幾度となく繰り返し、詩の雰囲気はひたる。作者の立場に少しでも近づこうと内容を吟味する。

時には作者の経歴や時代的背景から調べに入る事も多い。朗詠に入る前の楽しみでもある。

機会があつて人様の前で発表する時

育活動に少なからず不安と動揺とを感じないではいられない。しかしその反面、私に勇氣と活力とを与えてくれる。

少年易老學難成 一寸光陰不可輕
未覺池塘春草夢 階前梧葉已秋聲

自分がかつて少年時代に「座右の銘」とした朱熹の詩「偶成」を生徒達も無心に吟じ、彼等もまた自分の「座右の銘」とすべく、努力している姿に接し、練習に力が入る日々である。

謗者任汝謗 嗤者任汝嗤
天公本知我 不覓他人知

自分自身に正直で、生徒とのふれあいを大切にしていた教育活動を続けていきたいと考えている昨今である。

(福島市立松陵中学校教諭)

四月、そして出会い

宮内 寿 雄

しつとりと春の息吹を感じさせる季節、今年もまた、新卒と呼ばれる大学出たでの、フレッシュな先生を迎える四月がやってきた。私は校長になって以来、毎年新卒教員との出会いを経験しており、その都度、育ての楽しみを

味わっている。

そんな中で、数年前に出会った女子教員T先生のことだ。T先生は東京の有名大学を卒業し、赴任されたわけだが、辞令交付式の会場の初対面は、清らかな服装で礼儀正しく、はきはきした先生ぐらいいにしかなかったが、いざ一緒に勤務してみると、鈴木健二アナウンサーの著書「氣くばりのすすめ」を地で行くような人柄であることがわかってきた。毎日三十分前に出勤し、他の職員が出勤する前に、職員室や校長室の机上の雑きんがけをし、時には自費で花などを買ってきて、飾ってくれていた。校長室に來客があればすぐにお茶を持って来る。そんなときには空時間の同僚にも「お茶どうですか」の一声をかける。ふだんの態度は明朗快活、いつも笑顔で、授業での教え方も、適当にユーモアを交え、生徒からも大変親しまれ、この先生が新卒の二十二歳かと目を見はる思いをした。



その後、このT先生のご両親に会う機会を得たので、T先生の生い立ち(育てかた)をお聞きしたところ、ご両親